

古希を迎えた先生方

人生七十（古希）にして

石井 豊

私たちが70歳を「古希」として祝うのは、唐代の詩人・杜甫が詠んだ『曲江詩』にある「人生七十古来稀なり」という言葉に由来します。この詩句が生まれたのは、日本の歴史で言うところの奈良時代にあたります。当時の日本人の平均寿命が40歳位だったことを考えれば、70歳を超える寿命は非常に稀であり、特別な意味を持っていたのでしょう。

一方、孔子の『論語』には「七十にして心の欲するところに従えども、矩を踰えず」という言葉があります。これは、70歳を迎えて、ようやく自由と知恵を得ることができるという意味だと解釈できます。振り返ると、七十年という歳月はまるで川を下る舟のようで、穏やかな水面を進むこともあれば、荒波を乗り越えたこともあります。今、古希を迎えた私にとって、この七十年は医師としての節目であり、同時に心の旅路でもあり

ました。医師としての職業を全うし、生命に対する畏敬の念と患者への尊厳を大切に歩んできた道のり。そこで支えとなったのは、私のキリスト教信仰です。この信仰は、私の人生の指針であり、医師は患者に仕えるための手段でした。その信仰を歩みながら、心の中で信念と愛の価値を深く感じています。

若き日に読んだ『論語』で、孔子が「三十にして立ち、四十にして惑わず」と語っていた言葉は、当時は遥かに高くて達成困難な目標に思えました。しかし、時は矢のように過ぎ、今日、ようやく気づいたことがあります。それは、人生の一步一步に深い意味があることです。あの若き日の純粋で熱心な思いは、年を重ねても失われることなく、むしろ数多の経験を経て一層深まっています。かつて、病を外科的に治すことが医師としての使命だと思っていた私ですが、今では、医師の本当の使命は、単に病を治すことにとどまらず、心を癒し、必要ならば緩和ケアを提案し、患者に寄り添いながら希望と安心を届けることだと強く感じています。医療の進歩とともに、私の使命感も変化してきました。

若い頃、私はすべての病に打ち勝ちたいと考えていました。しかし、医学の限界と命の無常を知る中で、すべてを掌握する

ことができないことを学びました。歳月が流れ、病の前では謙虚であることの大切さ、人間の限界を理解し、受け入れることの重要性を実感しています。これまでの経験から、病は人の人生において避けがたい一部であり、私たちができることは病を取り除くだけでなく、患者が病と共に平穏に生きる手助けをし、限られた命を豊かに生きる力を与えることだと痛感しています。

私の歩んできた道の中で、患者は私にとって最も尊い教師でした。生死、痛み、不安という深い苦しみの中で見せてくれた忍耐と力強さには、心から敬服するばかりです。しかしその一方で、私自身の無力さを感じる瞬間も少なくありませんでした。医師としての43年間、患者との対話や視線の交わりは、すべてが貴重な教訓であり、思いやりと共感を学び、健康の大切さを再認識する日々でした。長年の臨床経験を通じて、病や苦痛が単に肉体的な苦しみだけでなく、心の重荷でもあることを深く理解するようになりました。1980年代から緩和ケアが注目され、医学以外にも宗教的・精神的な支えが求められるようになりました。キリスト教の教えである「神を愛し、人を愛する」という信仰は、私に患者の弱さを理解し、その苦しみに共感し、心を込めて支えることの重要性を教えてくれました。

現代では高齢化により多死社会となり、年間140万人の死亡者のうち四分の一以上ががんによる死亡となっています。医

学には限界があることを認識しつつ、スピリチュアル・ヒーリングの必要性はますます高まっています。今や、医師の務めは病を治すだけでなく、患者が命の終わりを受け入れることを助け、必要ならば緩和ケアのアドバイスを提供し、情報を提供することだと強く感じています。

孔子は「士は弘毅ならざるべからず、任重くして道遠し」と述べています。私は常に自らの医術を磨き、徳と信仰を基盤にした医療を実践しようと心がけています。医術ももちろん重要ですが、真の医道は「仁」に基づき、患者の利益を最優先にするべきだと考えます。診療の際には、傲りを捨て、神と共に歩み、その知恵をもってすべての判断を下し、患者に信頼と安心を提供することが重要だと思っています。古人は「学は逆水行舟の如し、進まざれば退く」と言いました。七十歳になった今も、学びの歩みを止めることなく、常に新しい知識を追い求めることが重要だと感じています。孔子の「学びて時に之を習う、また説ばしからずや」という言葉にあるように、知識を求める楽しみこそが心を若く保ち続ける力となります。本や自然、そして人々から学ぶことによつて、多くのものを得ることができると信じています。七十歳の知恵は、年齢によるものではなく、経験を通じて得た洞察と内省から生まれたものです。

「余力を尽くしてその志を成す。」七十歳を迎え、私の人生の理想はすでに明確です。残りの生涯を医療と信仰に捧げる決意

を新たにしています。この道は、肉体の癒しからスピリチュアル・ヒーリングへ、患者の要望から命への希望を育む道へと私を導いてくれました。残された時間を全身全霊で患者と共に生き、信仰を分かち合いながら、私自身と周囲の人々が希望を持てる社会を築いていきたいと願っています。

古希を迎え 医師人生を振り返ると

北区 森 下 清 文

医師になり45年になろうとしている。長い年月だが、あっという間に過ぎたようにも思う今日この頃です。

1980年、大阪医科大学（現大阪医科大学）眼科学教室で、東郁郎教授、渡辺千舟功教授の元で眼科の基礎研鑽に励み、1982年、当時硝子体手術の草分けの山中昭夫先生（神戸海星病院）、1983年、光凝固や眼内レンズの先駆者である管謙治先生（北野病院）の指導を受けることができた。まさにラッキーな眼科医のスタートだった。大学院には入学しなかったが1987年には「糖尿病コントロールと網膜症の関連」の臨床研究で学位を得、同時に講師として指導者の立場になった。大学病院勤務時代は、渡辺千舟先生の教への元、学会発表や後進の指導を行い、日本臨床眼科学会などで多いときは7題の演題を出すなど臨床・研究・教育に没頭できる充実した時代でした。現在では眼科で当たり前の細隙灯テレビシステムを日本で最初に導入し、その志は森下眼科に引き継いでいます。

1991年、叔父尾上道清先生（元北区医師会長で私を医師の道に導いてくれた人）の承継予定で大学を辞したが、叔父の急死で、森下眼科としてスタートを切り、2001年、現在の

森下眼科に新築移転し、地元の先生方や多くの患者さんに支えられここまでやってこることができた。

森下眼科は、開院当初から『見せる医療』(Visual eye clinic)を目標に多くの医療機器(当時病院にもないような機器)を備え、患者さんに病気を分かりやすく説明する目のホームドクターを目指した。診療形態を従来の image eye clinic (想像する医療イラストや絵を使って病気の説明をする)を visual eye clinic (見せる医療 写真などを駆使して病気を分かりやすく説明する)に変え、すべての検査結果をテレビ画面(大きなモニター)で見せるようにした。患者さんに対する病気の啓発活動にも重点を置いた。月一回の40人対象の病気に関する説明会は常に満席で、もつと多くの方にも伝えてあげてほしいとの希望があり、1992年からは北区民センターで「市民健康講座 目の勉強会」として、1年に一度500名の定員(毎日新聞紙上で募集)でスタートし、コロナ前の2019年まで28回行うことができた。延べ15,000人近い方が来場されたことになり、大きな成果を上げた。この市民講座の意義が認められ、神戸、京都、仙台などでも大きな市民講座開催依頼があり、仙台では震災後の仮設住宅訪問も加わり、眼科医会では「目の愛護デー 記念行事」の担当、大阪での糖尿病



目の勉強会で
司会中の筆者

眼学会、大阪大学主催の日本臨床眼科学会、近畿大学主催の日本眼科学会の市民講座の運営担当もさせて頂き、市民講座の草分けとしての役割を果たすことができた。人生100年時代を迎え、人々の健康志向がますますつれ、まだまだこういった会が必要のように思い、形を変えて新しい市民講座の復活ができればと考えている。

この間、最初のコロナ感染者の発症した年の7月に当院でも職員のコロナ感染があり、保健所の厳しい指導の下2週間の休診を強いられ、患者さんへの電話連絡などの対応に苦慮したことを今は懐かしく思い出す。

この45年の間に眼科も他科同様に病気に関するガイドラインが導入され、病気の概念や治療も大きく変わった。この年になっても日々研鑽の日々ですが、新しいことに残り残さそうになる一抹の不安もある。心強いのは息子が眼科を選び、診療所を継いでくれることになったことです。親の私が言うのもおこがましいが、私のたりない分を充分補ってくれる位に成長しています。会員の皆様にはどうか親子共々今後ともよろしく願います。



北区民ホールでの目の勉強会風景

します。

さて、道楽を超した趣味がある。マンガ・漫画です。

私の趣味を単なる漫画好きから漫画バカまで引き上げてくれたのが赤塚不二夫先生で、先生には感謝以外の言葉が思い浮かびません。1995年、1996年にTV東京系「TVチャンピオン 少年マンガ王選手権」という番組で2年連続優勝してから赤塚先生に会いがられ、多くの漫画家の先生に会わせていただく機会を得ることができた。憧れの漫画家の先生と漫画の話ができた、日本ロービジョン学会や大阪商工会議所などで赤塚先生と講演をすることができた、1996年、空前の規模の漫画博覧会「マンガ王国」で赤塚先生の肝いりで私の蔵書展示コーナーができた、赤塚先生や手塚先生、横山先生の書評や書籍の推薦文、トレーディングカードの説明文を書かせてもらった、まさに夢のような日々だった。



赤塚不二夫先生の
展覧会での記念写真



友人と赤塚先生の色紙を懐かしむ筆者

赤塚先生が亡くなり、しばらくは漫画と離れた生活が続き、時代小説（特に佐伯泰英、上田秀人、辻堂 魁氏）にはまった時期があったが、やはり長年生活に染みついたものは簡単には離れられず、いつもの自分に知らず知らずのうちに戻っていた。1954年生まれの私は、ゴジラと同年で古希を迎えた。ゴジラは一旦シリーズ終了と言いながら、何度も復活している。ちなみに昭和29年（1954年）のゴジラ原作本、ゴジラ第一作の絵物語の付録、昭和30年の「ゴジラの逆襲」付録本、ゴジラのシェーが表紙を飾った少年サンデーなどゴジラ関連本は私の貴重な蔵書です。眺めているだけでも懐かしい日々が思い出される。

戦後手塚治虫先生の登場で漫画界に新風が吹きこまれ、赤本や貸本漫画を得て、翌月が待ちどろしくして仕方がなかった月刊誌の隆盛の時代がやってきた。その後、世の中の早いテンポに合わせて週刊誌が登場、手塚作



1954年のゴジラ原作本、ゴジラ第一作の
絵物語付録、昭和30年の「ゴジラの逆襲」
付録、ゴジラのシェーが表紙を飾った
少年サンデーなどゴジラ関連本

品に影響を受けた漫画家たちが活躍し、漫画が文化として確立されていった。横山光輝、藤子不二雄、石森章太郎、赤塚不二夫、ちばてつや、さいとう・たかを、松本零士、永井 豪先生など多くの漫画家が活躍した。その昭和30年代から40年代、そして漫画が成熟した昭和50年代を私は体験したことになる。今の練りに練られた緻密で精巧な漫画よりも、昔のギャグ漫画、忍者漫画、戦記漫画、海洋漫画、冒険漫画、探偵漫画といったものに子供の夢が詰まっていたように思う。小学生から医学生、研修医時代と漫画に明け暮れる日々であった。勉強の合間が漫画であった。思えば、古き良き時代に生まれたものだ。

数年前酒の雑誌「たる」の漫画家列伝で横山光輝先生のことを連載したのを契機に、光プロから横山先生の復刻版「鉄人28号」や「伊賀の影丸」の推薦文の依頼があった。大好きで私が漫画好きの契機になった「伊賀の影丸」の書評は感慨無量でした。また、横山光輝生誕80周年記念誌にも執筆させていただきました、横山先生のファンのひとりとしていい思い出になった。

ちばてつや先生との最初の出会いは1997年7月18日、夕食の終わりのかけの1本の電話でした。突然「ちば」です。との電話がかかってきた。「ちば」という名前に心当たりがなく、聞き返すと「ちばてつや」ですとのこと、頭が混乱したのと、まさかといった驚きでいっぱいだった。以前同じような電話で、突然「タケカワユキヒデ」（ゴダイゴ）ですというのがあった

ことを思い出し、赤塚夫妻の悪戯だろうと思った。高井研一郎先生の還暦のお祝いをしているとのこと、赤塚先生宅にちば先生、北見けんいち先生、森田拳次先生、古谷三敏先生が集われ、そこで私に全員で色紙を書いて下さった報告であった。夢にも上る気持ちで話を聞いたのを覚えている。

最近では、ちば先生に届いた年賀状の中で、私の年賀状がもつともよかったとのこと、最優秀賞を二年連続で頂いた。北見けんいち先生が正月に釣りバカ日誌の色紙を送って下さった。生前高井研一郎先生や藤子不



ちばてつや先生に頂いた年賀状最優秀者賞
賞品を手にする筆者



1997.7.18 高井研一郎先生還暦祝いの席で
私のために諸先生が書いて下さった色紙

二雄^④先生はサイン入り新刊本をよく送って下さった。藤子先生は、自身の感謝の会パーティーに招待して下さい、京都国際マンガミュージアムの講演会などにも呼んで下さった。気さくに電話やメールを下さる先生が、徳弘正也先生です。サイン本だけでなく、アイデアノートや原画まで送って下さる。友達のように話をして下さる姿勢に、頭が下がる思いがします。本当に嬉しい。まさにファン冥利に尽きます。

一漫画ファンが、これほど作家の先生にかわいがっていただくととは想像すらできなかった。まさに夢の出来事です。

困ったことが起きている。蔵書の管理である。

本は生き物であり、硫酸紙でカバーし、空気穴を開けたビニール袋で包装し、段ボール箱に入れるか、本棚に並べるかして保存しているが、その量が半端でなくなり、置く場所が無くなってしまった。2年前京都の企業から私にマンガ博物館構想の打診があり、着々と準



自宅書庫
(湯本一生氏撮影)



診療所中2階書庫
(湯本一生氏撮影)



診療所3階書庫 (湯本一生氏撮影)

備が進められたが、不景気に勝てず中止になってしまった。10万冊の目録まで出来上がり、開館直前までいったのに残念でした。しかし、捨てる神あれば拾う神ありとの言葉通り、書籍や原画、アニメといったマンガ関連物の散逸や海外流出を危惧した文化庁が、昨年から日本の文化としてマンガやアニメの保存に動き出した。私の本も出版社や文化庁の肝いりで発足したマンガアーカイブ機構で保管されることになり、今はそのほとんどが京都の保管場所に運ばれ、整理されつつある。私の本が世の中の役に立つことを祈ってやまない。診療所や自宅から漫画本を運び出すのに、10トントラック4台が必要であった。その光景は圧巻であったが、50年以上集めた漫画本との別れであり、涙したのを鮮

明に覚えていた。昭和を支え、漫画を文化にまで高めた多くの漫画家が世を去ってしまった。残念です。

古希を迎え、今までのことが走馬灯のように思い出されるが、私を眼科医にしてくださった叔父の故尾上道清先生、眼科医として独り立ちさせてくれた故渡辺千舟先生に感謝したい。また、常に私に寄り添い、診療の手助け、子供の世話を一身に引き受けてくれた妻に感謝したい。診察に没頭し、まさに家庭を顧みない私にとって妻はかけがえのない伴侶であり、私の趣味を見て見ぬふりをしてくれたのも妻であった。妻には感謝しても仕切れないほどである。

私を支えてくださった同僚、医師会の先生方、眼科医会の先生方、製薬メーカーや器械メーカーの方々に感謝し、私に夢を与えて下さった雑誌や漫画家の先生に感謝してこの項を終えさせていただきます。長い文章にお付き合いました。ありがとうございました。



院長室で休憩（湯本一生氏撮影）

古希を迎えて

盛眼科医院 小 泉 須磨子

私が産まれたのは昭和20年代の最後で、まだまだ戦後色が残っていた記憶があります。大阪に行くと、路上に傷痕軍人の方が募金をつのって立っておられたのが子供心に強く印象に残っています。

あれから60年以上を経て、そろそろ自分の今後の身の振り方を考える毎日です。

老眼で目が疎くなっている、検査機器の進歩がすごくて、それに随分助けられる毎日です。なんとか機械が補ってくれているのを密かに実感しています。

逆に診療報酬の面でのデジタル化は制度の煩雑さについていけません。お役所からの文面はなんであんなに難しい表現なのか、その手続きはなんであんなに面倒なのか。

慣れないことに奮闘するにはエネルギーが必要で、だんだんその気持ちが薄れてきたなと思っていて、仕事に終止符を打つのもそう遠くないのかもしれない。

1970年大阪万博を顧みて

田淵 義勝

「人類の進歩と調和」をテーマに1970年3月15日開幕した大阪万博、私は高校2年でした。前年アポロ11号月面着陸のアメリカから衛星放送。11月30日阪急三番街開業動く歩道が実現されています。17歳という多感な世代で国内外にビッグなイベントが始まりました。個人的には私はテニス部、春の大阪大会で2年生ながら大阪代表となり夏のインターハイの準備で、万博どころでなく舞い上がっていました。万博会場が学校の春遠足となって、現地集合だったのを良いことに、アメリカ館の月の石にも目もくれず、どこかの数か所空いたパビリオンを見学し、午後からは学校のテニスコートに立って練習してありました。残念ながらせつかくの機会なのに以降、万博に行きませんでした。

さて、北区医師会としては万博開幕から1カ月も経たない4月8日 天六ガス爆発事故が発生。特に天六地域の先生方は被害者救援に多大な協力をされたことが大きなことでありまし

た。詳細は会誌84号にあり、またタイムマシン企画として最近の147号24ページに詳細あります。次号の会誌85号に、示されるように万博についての記述がありますが、跡地利用についてのコメントのみでした。(今回も跡地問題は議論されています)

2025年4月13日大阪・関西万博が開幕。1970年とは違った意味合いのイベントとなるようで技術革新一辺倒で夢が実現するかどうかではなく、テーマを「いのち輝く未来社会のデザイン」と掲げ、自然、医学、AIと調和を図りそこに東京地域ではできないおもしろい大阪を表したイベントにして頂きたいと思います。

万博会場跡地を世界平和運動の
中心地と科学教育と健全な
レジャーの国民施設に!!

高橋正勝

総合経費九千億の巨費を注ぎ込み、あれほど大規模な施設を造成した万博会場の跡地利用を当初に計画していなかったとは、まさに無責任政治の典型と思はれ、国民の一人として慨嘆にたえぬが、次の如く提案申上げたい。

表題の如く活用するには

経費を船田衆院議長案の如く、五、六十億調達できるものとするれば、

一、財団法人、万博記念世界平和運動基金を設立。

二、その年利三、四億をもって施設を管理運営する。

三、施設の一部を世界平和研究所として利用し、イデオロギーぬきの国際平和運動、一つの世界達成への実行機関として、列国をリードする如き存在として、恰もキリスト教に於けるパチカン、物理学に於けるプリンストン高等研究所の如く世界の頭脳を結集し、世界と日本のセンターとなしたい。

四、如何なる理由で国際博覧会条約では「会期終了後、半年間にすべての展示施設は撤去すること」と、なっているのか分らぬが、許される限り施設を温存し、且、植樹などにより万博の森とも呼ばれるよう潤いある市民の憩いの場とし、平常の全会場の管理運営は、学校協会?に一任。各バビリオンの管理は、関西には優れた大学が多々あるので、各大学に割当てれば、管理にはことを欠かず、施設はそのまゝ半恒久的に、科学教育と健全なレジャーの国民施設として役立て、又当初百名程度の学生では、広大なキャンパスを必要としない国連大学として、一部を利用できる。

五、万博会場として広く内外に紹介された知名度を利し、隣接の京都、奈良の古都地帯、琵琶湖周辺の景勝地帯と結んで、大規模な国際会議や催しもの会場として、随時使用し、西のジュネーブ、パリに対し、東洋に於ける国際文化的名所、人類のオアシス

となし得る。

斯くて平和日本の具体的表徴として、国是の方向を明確化して国際信用を増すと共に、国民殊に若者達に夢と希望を懷かせ、「人類の進歩と調和」と云うテーマに沿って、Expo '70をして精神文化と科学文明の世界史に於ける一極点として、永く意義あらしめることができるものと考えます。

